

れた12例ではTAE後約1週間でFT<sub>3</sub>は有意に低下し、他方、rT<sub>3</sub>とTSHは有意に上昇、FT<sub>4</sub>は著変なく、FT<sub>3</sub>とrT<sub>3</sub>との間のreciprocalな関係が示唆された。

### 8. I-131 MIBGによる副腎描出の検討

塙本江利子 伊藤 和夫 中駄 邦博  
加藤千恵次 永尾 一彦 古舘 正徳  
(北大・核)

I-131 MIBGの副腎髓質の描出について検討した。対象は、正常副腎をもつ43例と副腎髓質過形成の1例である。静注後72時間のイメージ上、視覚的に副腎の描出をGrade0からGrade3までに分けて評価したが、正常副腎は43例中17例(37.4%)にGrade1またはGrade2の描出を認め、副腎過形成ではGrade2の描出を認めた。CTで深さを測定し得た9例で、コンピュータ画面上にROIを取り、算出された正常の左副腎の%Uptakeは、Mean±2SDで0.048±0.027%であった。これに対し、副腎髓質過形成の%Uptakeは、0.055%と正常副腎と差がなく、イメージ上、これらを鑑別するのは難しいと思われた。また、副腎描出に影響を与える因子について調べたが、正常副腎の描出される症例では、そうでない症例に対し、尿中エピネフリンが有意に高かった。

### 9. <sup>131</sup>I-MIBGにて集積を示さなかったParagangliomaの一例

吉岡 邦浩 加藤 邦彦 広瀬 敏男  
高橋 恒男 柳澤 融 (岩手医大・放)

<sup>131</sup>I-MIBGシンチグラフィーで集積を示さなかった左側頭下窩のノルアドレナリン分泌性のparagangliomaの1例を経験した。

<sup>131</sup>I-MIBGが施行された頭頸部のparagangliomaは、われわれが知る限りでは、9例の報告がある。そのうち集積がみられたものは6例であった。また、この9例をカテコールアミンの分泌性の有無で分類すると、非分泌性のものは4例で、その全てに集積がみられたのに対して、分泌性のものは5例中2例にしか集積がみられず、分泌性のparagangliomaの方が陽性率が低いという興味ある傾向がみられた。この原因としては、現在までに

考えられているもののうち、腫瘍のカテコールアミンのrapid turnoverとノルアドレナリンとの取り込みの競合が推測された。また、頭頸部のparagangliaには、種々のエステラーゼやneuropeptideが存在するため、これらも集積低下の一因となり得ると思われた。

### 10. 褐色細胞腫の診断におけるI-131 MIBGシンチの臨床的意義

樋口 正一 小田野幾雄 清野 泰之  
木村 元政 酒井 邦夫 (新潟大・放)  
武田 正之 (同・泌)

昭和60年1月から63年4月までの3年3か月間に褐色細胞腫が疑われた54例にI-131 MIBGシンチを施行した。そのうち組織学的に褐色細胞腫の確定診断が得られたものは15例(16病巣)あった。これらのうちI-131 MIBGシンチで有意な集積がみられたものは、良性褐色細胞腫の副腎原発では9病巣中7病巣、副腎外原発では4病巣中3病巣であった。また、悪性褐色細胞腫の3原発巣には全て集積がみられた。この結果、検出率は81%であった。CTでは全病巣が描出されており、病変の検出にはCTが優れていたが、I-131 MIBGでは偽陽性例はなく、その疾患特異性は100%で、褐色細胞腫の診断に有用であった。

### 11. 心筋梗塞後心室瘤症例の血栓検索の検討—<sup>111</sup>In-oxine血栓シンチグラフィーを用いて—

津田 隆俊 久保田昌宏 高橋貞一郎  
森田 和夫 (札幌医大・放)

心筋梗塞後心室瘤を持つ17例を対象に心腔内血栓検索を行い、他の方法との比較において、その特性を検討した。対象17例のうち、血栓scanで陽性の8caseは心エコー法(UCG)または左室造影法(LVG)にても左室内血栓を認め、6caseはUCGまたはLVEFにて陽性で、血小板scanでは陰性であった。これらのことから、血小板scanでは、現在成育を続ける活性化血栓のみを検出し得、器質化血栓では陽性となり得ないことが考えられた。左室内血栓の機序については種々の説がとなえられ、一定の見解はない。血小板scanでpositive群とnegative群で、LVEFと発作から同検査までの期間に関